

J A高知県安芸地区 農福連携の取り組み

市川：皆さま、こんにちは。J A高知県安芸地区安芸営農経済センターの市川和加と申します。お隣にいらつしやるのが横山さんです。

横山：農業就労サポーターをしております、横山と申します。今日はよろしくお願ひします。

市川：J A高知県安芸地区は、高知県東部の8市町村からなっております。管内は施設園芸が盛んで、温暖な気候を生かして、ナスとユズの栽培が盛んな地域です。

まず、農福連携の取組みの経過について説明します。一つ目が無料職業紹介事業、二つ目が農福連携の取組みになります。

無料職業紹介所という、J Aが農家さんのために行っているハローワークのような仕事がベースにあり、その発展形が農福連携だと考えています。

1. 無料職業紹介事業

無料職業紹介事業については、農福連携も、無料職業紹介所で農家さんに紹介する事例も同じような内容となっております。

まず、働きたい人から相談が来て、その後、J Aに求職票を出してもらって、面接をします。後は14日間、法律で定められている試用期間を経て、実際に雇用ということになります(図1)。

(図1) 農家への紹介の流れ



(写真左から) 横山氏、市川氏

J A高知県安芸地区安芸営農経済センター
営農企画課 課長 市川 和加
農業就労サポーター 横山 木実子

(出典) (図1・2) とも報告者作成

2. 農福連携

農福連携については、平成30年5月に「安芸市農福連携研究会」が発足し、関係機関等が、お互いに話し合いの場をもつところから始まりました。このフローチャート(図2)が、安芸市の就労支援の全体像です。

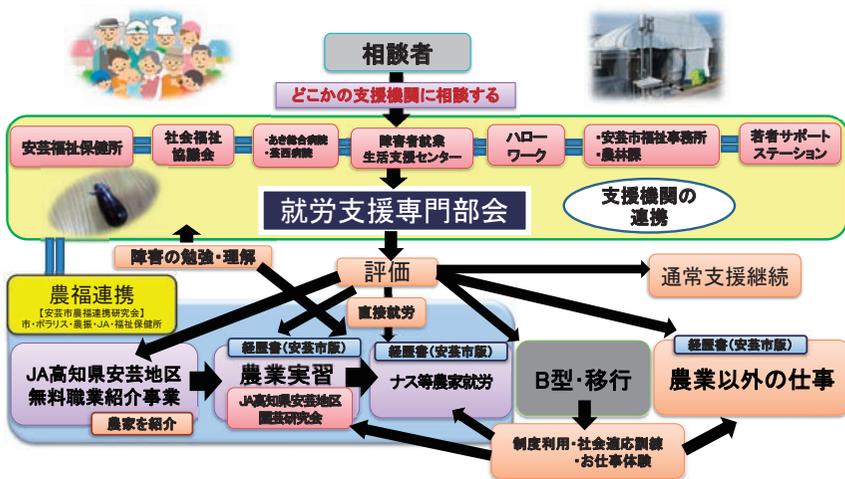
安芸市農福連携研究会は、平成30年10月に取組みを始めました。

まずは長野や大分、島根、香川といった先進地の事例を、JAの上司^{(*)2}、当時のJA土佐あき組合長も一緒に現地をまわって、勉強させてもらいました。

その後農業者さんやJA職員向けに、障害者雇用への理解を深める研修会も行いました。

後々振り返ってみると、就労体験を行ったことが一番よかったと思います。研究会メンバーが実際に集出荷場などに出向いて、農福連携で

(図2) 安芸市の就労支援



どんな作業ならできると、作業の切り分けについて皆で考えることができました。

JAでは農業分野はある程度分かっていますが、県の福祉サイドや、市の社会福祉協議会がどんなことをしているのか、分からないところもたくさんありました。

毎月1回定例会を開催し、情報を共有することで、これから一緒に研究会をやっていくにあたっての目標が見えてきました。また、自分たちだけではどうにもならないことを教えてもらい、心強く思いました。

研究会では「農福連携高知県サミットinあき」を開催し、講演会や事例発表、マルシェを通じて農福連携の輪を広げています^{(*)3}。

他にも全国各地から視察を受け入れ、パンフレットを作成しております。

(*)1 安芸市農福連携研究会発足時のメンバーは以下のとおり。高知県と安芸市の福祉・農業担当部門とJAからなる。

- ・安芸市福祉事務所
- ・安芸市農林課
- ・高知県安芸福祉保健所
- ・高知県安芸農業振興センター
- ・高知県障害者就業・生活支援センター ポラリス
- ・JA高知県安芸営農経済センター 営農企画課

(*)2 当時はJA土佐あき。平成31年1月に県内12JAと連合会機能が統合し、JA高知県が発足。旧JA本所が安芸地区本部となった。

(*)3 「農福連携高知県サミットinあき」の講演会・事例発表の様子は、安芸市農福連携研究会YouTubeチャンネル <https://www.youtube.com/@aki-noufuku/featured> で視聴可能。

3. 農業就労サポーター

当初、私が平成30年に3事例程担当し、農家さんに紹介させていただきましたが、なかなかうまくいかない事例も多く、このままでは農福連携が続くのかなあ?と、ちょっと不安に感じていたところでした。

そこで当時、私の課長だった方が、農業就労サポーターを雇おうと提案しました。令和元年に横山さんが入って、定着率が本当に上がった

と思います。

ここからは農業就労サポーターの横山さんにバトンタッチをして、2つの事例を説明してもらいます。

横山…はい、横山です。よろしくお願ひします。私は直接雇用をしている農家さんと、生きづらさをかかえているけれども、働きたいとおっしゃる方との仕事をつないでおります。

農福連携の技術支援者の研修は高知県では昨年度はじめて行ったのですが、その一期生で、また高知県の農福連携推進アドバイザーという形で、農福連携に取り組みたい地域に出向いて、アドバイスさせてもらったり、個別案件の相談に応じたりしています。

私は、この仕事に就く前は25年間専業主婦でした。次男に障害があったり、地域で民生委員をしたりしていた関係で、こういうことは相性がいいんじゃないかな？と思っていたところ、

整える仕事をさせていただいております。

ナスの場合、手入れに時間がかかると、収穫がおろそかになってしまいます。3人が来るまで、収穫できずに捨てていた分を、今は出荷に回せるので、とても助かっているという話を農家さんから聞かせてもらっています。

ここで働いているHさんは、軽度知的と発達障害、精神障害を併せ持っています。支援機関としては、「高知県障害者就業・生活支援センター ポラリス（以下、ポラリス）」、私たちは「なかぼつ（・）」と呼んでいます。ここと安芸市の福祉事務所、安芸市社会福祉協議会が入っています。

このHさん、とにかく真面目すぎる人で、自分では失敗を許せないと思っているみたいです。ちなみに他にも、とにかくメモ魔の方です。何があっても全部メモします。メモをしている間は私も待っています。そしてメモをまた確認

私の友人が農福連携研究会のメンバーだったこともあり、「その仕事、ちょっと関心があるき、見てみたいがやけど…。」すみません土佐弁で。そう言ったところ、「サミットがあるからちよつと来てみない？」ということで行きました。「これ私の仕事やなあ」と思ってJAに売り込みに行き、その当時の課長に認めていただき、今に至ります。

事例1…N農園で働くHさん

N農園さんは施設園芸でナスを栽培しています。ここでは3人を直接雇用しています。週に3、4日、多い方は、週に5日働いている方もいますが、大体午前8時からお昼ぐらいまで、また、季節や体調によって、時間は自由に短縮したり延ばしたりできるよう、本人にあわせてゆるい形です。作業は農家さんと相談しながら、葉かきや芽かき、ハウス内の清掃など、環境を

します。その間も待っています。

それから、一生懸命仕事はするのですが、自分ができるのではないのかという恐怖心が常にあるものですから、「うまくできている、これでいい、園主さんが凄く喜んでいた」ということを、私が忘れずに付け加えておかなくはないけないようなタイプの人です。

また、朝8時就業の場合、7時半ぐらいのバスに乗らなくてはいけないのですが、そのために4時半に起きて、自分の荷物と身だしなみをチェックし、それを繰り返し行うような子です。朝起きて目が覚めて、あ、やばいと思って、慌てて車に乗って出勤できる私とは大違いで、「あなたのそういうところを私は尊敬している」と常日頃から伝えるようにしています。

この子はメンタルがとにかく弱く、気になることがあったら直ぐにLINEをします。そのたび私が分かる時はアドバイスするし、

ちよつと専門的な、彼女の障害に関わる原因にあるのかなと思つたら、ポラリスの職員や保健所に連絡して、アドバイスをもらつたり、彼女と話をしてもらつたりするようにして、仕事が続けられるようにしています。

就労の前に、必ず生活というものがあります。施設外就労なら、専門職の方がいらつしゃるので、その方が全部責任を持つてくれるのですが、直接雇用の場合、農家さんにその責任はとってもらえないけど負えません。困ったことがあれば、農家さんも一緒に考えてくださいます。私たちが間に入って、専門職からのアドバイスをもらうようにしています。

事例2…JA集出荷場で働くSさん

JAの集出荷所で働いているSさん（発達障害）です。普通ナスだけだと、夏場が農閑期で仕事が途絶えるのですが、ここの集出荷場は、オクラやミョウガなど夏の間も作物があつて、年間雇用ができるので紹介しています。

この方は元々、普通に働きたいとJAの無料職業紹介所に登録にきましたが、当時担当だった市川さんが「ちよつと心配やき、一緒に面接してくれん？」ということでお会いしました。「本人は多分おつしゃらんけど、ちよつと心配やね」ということで、その時受け入れてくださった農家さんに紹介しました。

最初のうちは調子よく働いていたのですが、そのうち「何かおかしいよ」という話があるようになりまし。私のところにも彼女から、「作業で言われちゆうことがよう分からんき、教えに来てください！」と連絡がありました。



行ってみると、園主さんとベテランの作業員さんとの指示が全然違つていたのですね。

農家さんによつて、ここで切り返して欲しいとか、この葉っぱは除けて欲しいといった指示が変わることがよくありますが、そこでは完全に二人が全く違うやり方をしていたわけです。私は当時口出しできる立場になく、気が弱かつたので、「もうちよつと様子を見ようね」といつているうちに、結局彼女はもうここではこれ以上勤まらないということで辞めました。

私もこのまま一人で彼女の支援をするのは難しいと思つたので、「なんこく若者サポートステーションあき・サテライト（以下、サポステ）^(※1)」に協力をお願いすることにしました。ここにはカウンセラーがいて、農業以外の仕事についても幅広く支援してもらえます。

私たちは就労継続支援B型事業所を勧めましたが、彼女は社会保障があり給料がいいので、

どうしても集出荷場に行きたいといいました。私たちは「ちょっと人間関係がしんどいかもしれんよ」と伝えたのですが、それでも行きたいというので行かせました。

で、案の定、人間関係には凄く苦しみました。今も苦しんでいます。でも、愚痴がやつと私に言えるようになりました。SOSを全然出せない子でしたが、「困った、嫌なことがあった、こんなことまた言われた」とLINEで言ってくるようになりました。その辺も凄く成長だと思うので、そのたび、「まあ、そういうこともあるよね?」「そう、そういうことあると辛いよね?」と話をしながら、これ以上はちょっとまづいなと思うと、サポステさんに入ってもらったり、「サポステさんに面接に行って、カウンセリング受けてきいや」と話したりして、また、サポステさんで話を聞いてもらおうと少し落ち着き、「また仕事頑張れる」という感じになっています。

私達はできないことを障害のせいにしてたり、その人の性格のせいにしてたりしがちですが、その人が失敗するのは、失敗をするだろうと予見できなかった私の責任で、「その時何で声掛けせんかったか?」ということになるのではないかなと思っています。

そして工夫や知識が足りないから、心無い言葉や言葉足らずになって、働きたいと思ってる人を苦しめているのではないかと思うこともよくあります。

二つ目は、農家さんとの信頼関係を築くことです。

私、素人ですので失敗します。最初、一番切ってはいけない樹をいきなり切ったことがあります。その時農家さんが「お前、何しおら!?!」と言ったら、私はたぶん続けてないと思います。

その時、農家さんがおっしゃったのが、「うん、うん、かまわん、かまわん。その分、風通しが

最近では、周りの職員さんが、彼女のことを凄く応援していることがやつと伝わったようで、彼女は「皆が見てくれてるのが分かった。頑張る」と言っています。

(*4) 地域若者サポートステーション(通称サポステ)とは、就業・就学に不安を抱える者(対象年齢は15歳から49歳)に対し、本人や家族だけでは解決困難な課題について、地域の支援機関や民間団体と連携しながら、職場定着まで全面的にバックアップする厚生労働省委託の支援機関のこと。全都道府県に計177カ所設置されている。

高知県では高知県社会福祉協議会(高知市と南国市、須崎市と安芸市にサテライト)と、NPO法人若者就労支援センター(ながるねっと(四万十市)が受託するサポステがあり、支援を行っている。
厚生労働省ウェブサイト
<https://saposute.nelhiv.go.jp/>
高知県社会福祉協議会ウェブサイト
<https://www.kochiken-shakyo.or.jp/saposute/>

4. 農業就労サポーターが大切にして SOSを

私が大切にしていることは、三つあります。一つ目は、その方に合った支援方法・作業内容を探すことです。これは基本中の基本です。

良うなって、病気が減るき、ちようどええ」：こういうふうに言ってきた農家さんだったので、私は続けることができます。

そういう失敗を、新しく入った利用者さんに「私、こんな失敗したんよー」って言うんですね。[だけど、どんな失敗をしても、最悪な失敗は、あなたがここで体調が悪いのに無理をして、ここで具合が悪くなることやき、それ以外のことは失敗じゃないからね]という話をよくしています。私が本当に基本的なことであっても農家さんに聞きます。それから利用者さんは、私が農家さんと馬鹿話をしているのを見ているので、「ああいうものの言い方しても、大丈夫なかな」「この農家さんは、こんなことでは怒らんな」「この農家さんは、こんなことでは怒らんな」ということが分かると、そこで働きやすくなるのが実感としてあります。

それから三つ目が、一人で問題や情報を抱えこまないということです。

これも基本ですが、チームで動いているわけではないので、私だけに情報が集中しないように、私は必ずその人の背景にある保健所やサポステ、ポラリスなどの方々と必ず情報を共有するようにしています。

安芸市農福連携研究会は、必ずそれができるように言っていて、「ここで働きゆうあの人だけれどね」と言ったら、たぶん誰でも「あ、あの人ね」と、皆がアイデアを出してくれるような組織になっています。そこがやはり、安芸がすごく頑張れている原因の一つではないかと思っております。

5. これからの仕組みづくり

市川…今まで、農福連携に携わってきて、もう、一歩進んでは二歩下がるといったことが多々ありました。それでも活き活きと働く皆さんを見て、つなげて良かったなあと思います。そして

6. 目指す将来像

生きづらさを抱えた方が、農作業は楽しいと思ひ、継続して働いている方もたくさんいます。実際に就農された方もいらっしゃいます。

受入れ農家さんも、最初は、労働力不足を補うぐらいの思いで取り組まれた方もいたのですが、一緒に働くことで活き活きとした働く姿を見られて本当に良かった、とおっしゃる方もいます。そして実際に規模拡大された方もいらっしゃいます。

J Aとしては、受入れ農家も働く人もWin | Winの関係になったことで、これからもサポート支援を強化していきたいと思ひます。

農福連携に携わって肌で感じたことですが、生きづらさを抱えた方も、誰かの役に立つことで幸せを感じ、受入れ農家さんも、生きづらさを抱えた方が、活き活きと働く姿を見ることが

横山さんが来てくれて、雇用が継続していくことが、とても良かったと実感しています。

ただ、安芸の農福連携が進んできたとはいえ、まだまだ課題が残っています。

ひとつは、農福連携の仕組みづくりです。役割分担や情報共有といった体制づくりについてはだいぶ整ってききましたが、継続していかなければならないと思ひます。

重要なのは、受入れ農家さんの拡大です。まだちょっと足りないので、補助事業を活用したり、研究会や集出荷場で説明したりして、理解してくれる人を増やしていく必要があります。

また、受入れ農家さんと働く人をつなぐだけではなく、働く人の雇用の継続が大事です。

特に安芸地区では作業受託でなく、直接雇用をやっておりますので、これが続いていくのが重要と考えております。

できて幸せを感じ、支援者も生きづらさを抱えた方と受入れ農家をつないで、継続して働いていることに幸せを感じています。

三方が幸せではないと、歯車があわなくなり、農福連携が続いていかなくなってしまいました。

三方良しの農福連携、三方良しの幸せの輪が、J A高知県安芸地区から日本全国へ広がっていくことを、切に願ひます。

ご清聴ありがとうございました。